



再生キーワード「昔の台は、…」

2005年開催「遊べるパチンコフォーラム」より。
こうした原点に立ち返ることも重要では？



2015年、明けましておめでとうございます。今年もよろしくお願い致します。

今回は2015年最初の掲載ではありますが、例年の通り原稿を作成しているのは12月中旬。巷では、総選挙が行われて自民党(与党)が圧勝…と、何だか2012年末のシチュエーションに似ているなあ、と感じています。ただ2012年当時と異なるのは、いわゆる「アベノミクス」によって株価が相当上昇してしまっている上に、大企業優遇の「トリクルダウン」による格差拡大や、過度の円安進行と原油安などにより、経済にひずみが出始めているところでしょうか。

そのような中、遊技業界の2015年に望むことを考えてみたのですが、一年前に期待を込めて書いていた「遊べる遊技機のさらなる推進」は、確実に進んでいるように感じます。…いや、進めざるを得なくなっている、といえるかもしれません。それに関し、私が今年の市場動向を振り返って、特に後半興味深いな…と思ったのは、リメイク機種 of 台頭でした。もちろん、ヒット機種のリメイクはこれまで何度も行われて来てはいますが、大多数が「継承しつつ進化」など、時代に合わせた味付けをしているという部分をアピールしていました。しかし割と最近のリメイク機は、より「元祖に近い」部分を売り物にしており、やはりパチンコホールから足が遠のいている層の呼び戻しにも、強く力を入れ始めたことが感じられたのです。

そういえば、高齢層(私も含まれます)のファンからよく聞く言葉に、「昔の台は、面白かった」というのがあります。パチンコでは90年代、CR機の射幸性が絶好調で業界の売り上げがぐんぐん伸びていた時期、そうした意見は年寄りのノスタルジーとして一笑に付され、規制が厳しくなった2000年代以降は派手なタイアップと演出の複雑化によって、単純なゲーム性は相手にもされなくなりました。

しかし遊技機代そして一人当たりの参加料が上昇する一方、内部で崩壊は確実に進んで来たのでしょうか。昨年のパチンコ人口は遂に最盛期の3分の1、つまり1000万人を切ってしまいました。

一体、ファンを戻すにはどうしたらいいのか…? それこそ、本当に業界関係者一人一人が真剣に考えざるを得なくなって来ています。そこで、思い出して頂きたいのが先ほどの言葉です。「昔の台は、面白かった」…これを、何とか業界再生のキーワードにできないでしょうか。とかく、私たちの業界では新しいものに過大な価値を見いだす傾向がありますが、実はよく観察してみると、意外に古いアイデアやシステムから発展しているものだったりすることが、少なくありません。温故知新は無価値なものではなく、むしろ急務といえます。

そうした考えに基づき、私が2015年に最も業界に望んでいることは、さらなる「温故知新」の方向性を持って「ファン目線」で考えて頂きたい、ということです。なぜ、昔の台が面白かったのか? ファンが本当に求めているものは何か? それをより一層考え解き明かして行くことが、現在の問題解決への一番の近道に思えてなりません。冒頭に挙げた格差拡大や経済不安といった問題を背景に、業界でも引き続きカジノ関連やエコ遊技機、イベント問題など様々な不安定要素が残っています。まずはパチンコがファンに支持されていた時代に遡って、足下から考え直し問題を解決して行く…そんな一年になることを、お祈りしています。

じんぼう・みか

法政大学卒業後、文具メーカー勤務を経て業界誌記者となり、1993年独立。取材記事、コラムなど連載。近著「パチンコ年代記」(パジリコ、07年)